



イ・ヒョク Hyuk Lee

2022年ロン＝ティボー国際コンクールで優勝。それ以前には2016年にパデレフスキ国際コンクールで優勝し、18年には浜松国際ピアノ・コンクールで第3位に入賞している。2000年にソウルに生まれ、9歳でオーケストラ・デビュー。モスクワ音楽院でV.オフチニコフに師事した後、パリのエコール・ノルマル音楽院を首席で卒業した。

これまでパリのシャトレ座や、バーデン＝バーデン祝祭劇場など著名な会場で演奏し、ワルシャワ・フィル、モスクワ・フィル、ブラハ放送響、N響などと共演。2023年のフランス革命記念日にはエッフェル塔の下で演奏し、テレビ中継された。ラジオ・フランス音楽祭、ポーランドのドゥシニキ音楽祭、ノアのショパン・フェスティバル、ソウル・アーツ・センターのジルベスターコンサートなどにも出演している。美弟のイ・ヒョとの2台ピアノによるコンサートは、現代ピアノ界において最も印象的なデュオの一角を占める。

2023～24年にかけては、ピアノ、ミヨー、ガーシュウィン、サン＝サーンス、カブーステン作品などを弾くコンサートを各地で開催し、大きな反響を呼んだ。



©Yuji Ueno

務川慧悟 Keigo Mukawa

2021年エリザベート王妃国際音楽コンクール第3位、2019年ロン＝ティボー＝クレスパン国際コンクール第2位入賞。バロックから現代音楽までとレパートリーは幅広く、各時代、作曲家の様式美が追究された演奏、多彩な音色には定評がある。また古楽器であるフォルテピアノでの奏法の研究にも取り組み、造詣を深めている。現在は日本とフランスを拠点に、ソロ・リサイタル、室内楽、オーケストラとの共演を重ねている。

2025年7月にはラヴェル生誕150年を記念したピアノ作品全曲演奏会、11月には「革新のベートーヴェン」と題したリサイタルツアーを開催。精緻な表現と詩的な響きによる圧巻の演奏で、各地の聴衆を魅了した。CD「ラヴェル：ピアノ作品全集」(NOVA Record)をリリース。同盤はEtcetera Recordsより再リリースされ、フランスの「Le Monde」紙をはじめ多数のメディアで取り上げられた。近年は文筆にも活動の幅を広げ、『小説すばる』で連載中のエッセイ「ピアノとワインと、ときどきパリ」も好評を博している。令和2年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞、第33回日本製鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞、第33回出光音楽賞受賞。公式サイト <https://keigomukawa.com/>



©Waldy Martens

ジェイデン・アイジク＝ズルコ

Jaeden Izik-Dzurko

カナダ出身。マリア・カナルスやサンタンデルの各国際コンクールで優勝したのち、2024年のモントリオール国際コンクールとリーズ国際コンクールでも優勝。コミュニケーション能力、洗練された技術的な卓越、芸術的成熟は、聴衆はもちろん批評家や作曲家たちからも称賛されている。

マドリードの国立音楽堂、カーネギーホール、ワイル・リサイタル・ホール、ミュンヘンのキュンストラッハウス、パリのサル・コルトーなどの著名なホールでリサイタル・デビューを飾ったほか、近年はモントリオール響、マドリード響、ビルバオ響、オックスフォード・フィルなどと共演している。

2025年シーズンのハイライトには、ナショナル・アーツ・センター管やロイヤル・リヴァプール・フィルとの共演のほか、パリのルイ・ヴィトン財団、ラインガウ音楽祭、ウィグモアホールでのソロ・リサイタル・デビューなどが挙げられる。

2024年10月には、リーズでの演奏の録音がワーナー・クラシックスからリリース。同年にはボルレッティ＝ブイトーニ財団からフェローシップを授与された。



©Frances Marshal

ソフィア・リュウ Sophia Liu

ソフィア・リュウは「驚異的なヴィルトゥオージテ (Bachtrack)」、「明瞭で繊細、洗練され、自然さを超えて流麗さすら感じさせるタッチ」(ル・モンド紙)と評され、同世代で最も魅力的なピアニストとして頭角を現した。

上海に生まれて日本で育ち、モントリオールに渡ってダン・タイソンに師事。エトリンゲン国際コンクール第1位、A.B.ミケランジェリ国際コンクールでは複数の賞を獲得している。2023年にロバートソン指揮クリュヴァント管との共演でデビューしたのち、トゥールーズ・キャピトル国立管やニース・フィルと共演し、ラ・ロック・ダンテロン国際ピアノ音楽祭、「ショパンと彼のヨーロッパ」音楽祭、ラ・グランジュ・ド・メレ音楽祭などに登場。

2025/26年シーズンはN響デビューで幕を開け、バンクーバー響やシンフォニア・ヴァルソヴィアと共演。ベルリン・コンツェルトハウスやラ・フォル・ジュルネ音楽祭、ボローニャ音楽祭、東京などでリサイタルを行っている。

2025年には初のスタジオ録音となる、リストやショパン作品によるソロ・アルバムをMIRAREレーベルからリリース。



©Rajchert Lukasz

ケヴィン・チェン Kevin Chen

カナダのエドモントン生まれ。8歳でカナダ音楽コンクール優勝を果たし早くから全国的な注目を集めた。

詩的な感性、自然な雄弁さ、そして目を見張る技術で称賛され、同世代でも独自の存在としてたちまち頭角を現し、フランツ・リスト国際コンクール、ジュネーヴ国際コンクール、ルービンシュタイン国際コンクールなどで優勝。2025年にはショパン国際コンクールで第2位を受賞し、ポーランドの批評家からは「技巧の誇示ではなく、完全なる音楽の物語」と評された。

これまで、ワルシャワ・フィル、スイス・ロマン管、台北響、ハンガリー国立管などのオーケストラと共演。またラ・ロック・ダンテロン国際音楽祭、「ショパンと彼のヨーロッパ」音楽祭、ドゥシニキ国際音楽祭などの音楽祭に招かれ、カーネギーホール、ベルリン・フィルハーモニー、ミュンヘン・プリントレーゲンテン劇場、セント・ジョーンズ・スミス・スクエア、台北国立コンサートホールなど主要な演奏会場で演奏している。現在はハノーファー音楽演劇大学でA.ヴァルディ教授に師事。



©Maxim Abrossimov

ユリアンナ・アヴデーエフ

Yulianna Avdeeva

気高い情熱とヴィルトゥオージティを併せもつピアニスト、ユリアンナ・アヴデーエフは、2010年に第16回ショパン国際コンクールで第1位に輝き、コンクール史上、マルタ・アルゲリッチ以来45年ぶりの女性優勝者として国際的な名声を獲得した。今日のアヴデーエフの「自発的で劇的な起伏に富んだ」演奏は「深みと彩りに満ち」ており、その「揺るぎないテクニックはもとより、ひたむきな情熱と音楽性によって、常に抜きん出ている」(英紙『ザ・テレグラフ』)。ヨーロッパでは、ベルリンのピエール・ブーレーズ・ザール、ウィーン・コンツェルトハウスなどの会場で演奏を重ねており、最近では、ザルツブルク音楽祭やアムステルダムのコンセルトヘボウにてリサイタル・デビューを果たした。

近年のゲヴァントハウスでのライブツィヒ・ショスタコーヴィチ音楽祭への出演を経て、今シーズンはアンドリス・ネルソンス指揮ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団とのヨーロッパとアジアツアーが予定されている。2025年にはPENTATONEレーベルから『ショスタコーヴィチ：24の前奏曲とフーガ(全曲)』を発表し、『第1回新レコード・アカデミー賞』の鍵盤楽器部門賞を受賞した。

2026
season

ミューザ川崎で聴く
ピアノリサイタル・シリーズ

夜ピアノ